

■ アクティブ・ラーニングを導入した地域連携教育

地域と連携・地域を活用したPBL[※]教育の導入と効果

※PBL : Project Based Learning

日 時：2016年09月06日〔火〕 14:45-15:45

会 場：アルカディア市ヶ谷

主 催：公益社団法人 私立大学情報教育協会

講 師：信州大学 総合人間科学系 准教授

- キャリア教育・サポートセンター 副センター長

- 産学官・地域総合戦略推進本部長

林 靖人 (Hayashi Yasuto)

報告の概要

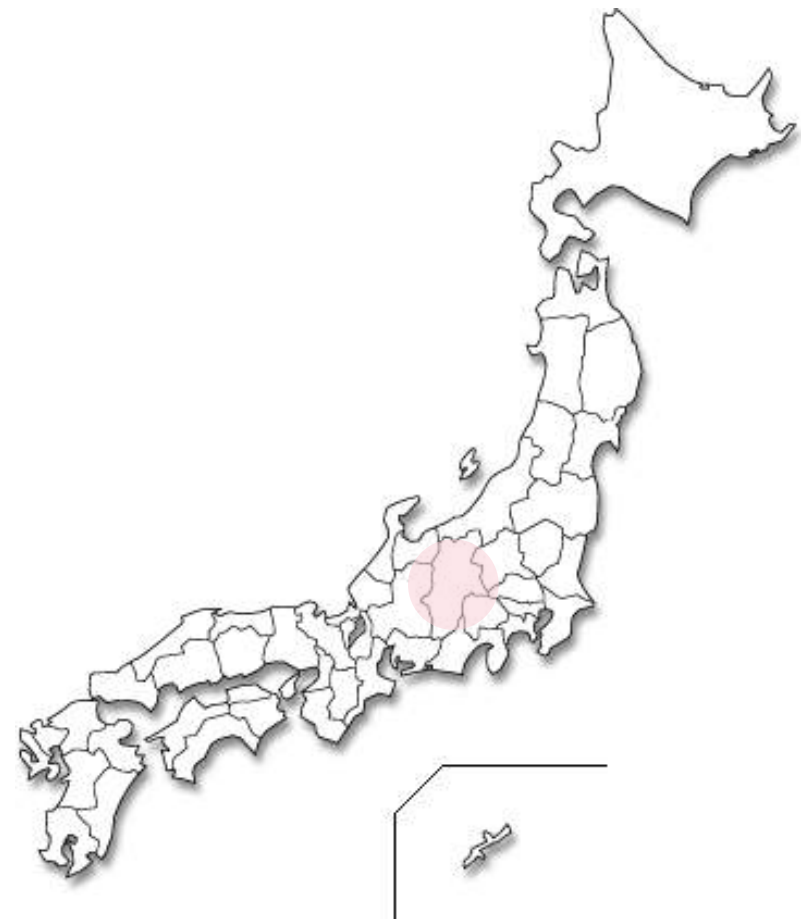
1. 信州大学の概要
2. 地域・連携・マネジメント
3. COC事業を活用した
PBL教育環境の基盤強化（総論）
4. PBL授業の開発（各論）
5. PBL教育の効果
6. 今後の発展と課題

全学的観点から個別のPBL授業へ

時系列に

1. 信州大学の概要

地域との繋がりと研究・教育の発展



信州・長野県の概況

- 3つのアルプスが形成する日本の屋根
- 日本の山村風景を形成する「中山間地域」が多数
…村の数、農家数、長寿「日本一」
- 雄大な自然環境をテーマに文化・芸術も発展
…美術・芸術館・博物館、公民館等数 「日本一」
- 精密機械工業の発展
 - ・ 養蚕の発展から始まる機械工業
 - ・ 諏訪エリアはかつて「東洋のスイス」
 - ・ 時計・光学機器等の発展 セイコーEPSON他
→現在は電子・情報通信機器
- 「醸造・発酵」など食品加工・保存技術の蓄積
 - ・ 日本酒、ワイン、味噌・醤油、漬け物等
- 晴天率が高く、冷涼・寒暖差のある気候
 - ・ 高原野菜や果樹栽培が盛ん
 - ・ 近年ではワイン用ブドウの適地に



信州の主要4圏域に配置された知（地）の拠点

信州全域をキャンパスとして、学生11,000人が学ぶ



信州大学 教育学部
(写真は1895年に建設された元県庁書庫)



信州大学 工学部



信州大学 繊維学部

(写真は1930年に建設された現・信州大学繊維学部講堂)

信州独自の気候・風土、歴史、文化、産業の
体系化、高度化が信州大学の起源

松本、伊那、佐久、善光寺の4平野、10地域
(広域)を「学」によってまとめ、信州として
総合力を発揮するための研究や教育を推進

信州大学法人本部、
人文学部・経法学部・理学部・医学部
全学教育機構（共通教育）
(山々に囲まれ、緑あふれるキャンパス)



信州大学 農学部
(入口となるユリノキの並木)



信州大学のビジョン



信州大学ビジョン2015・アクションプラン

Vision 2015 Action Plan

オンリーワンの魅力あふれる地域拠点大学をめざして

信州大学は、著しい変貌を見せる近年の社会状況の中で、国内外の動向を展望し、「理念と目標」のもとに「信州大学ビジョン2015」を取りまとめ（2008年1月）、今般、このビジョンの実現を目指してアクションプランを策定しました。（2009年1月）

本学は、大学を取り巻く内外の厳しい環境を克服への機会としてとらえ、歴史と立地条件を活かし、信州ならではの我が国唯一の教育研究領域を開拓します。

個性豊かな学部が協働し、総合力と相乗効果を発揮させ、教育研究にキラリと光る特色をもたせ、地域とともに成長し、世界へ飛躍する「オンリーワンの魅力あふれる地域拠点大学」をめざします。

教育
研究
地域貢献
大学経営

オンリーワンの魅力あふれる
「地域拠点大学」をめざして



PLAN the N.E.X.T. New Evolution X Triple G&L

3つのGとLで実現する
信州「独創の知」

G³ × L³

大学運営の基本方針「3つの「G」と3つの「L」」

信州大学は、「最も学んでみたい大学」を目指し、『3つの「G」と3つの「L」』を基本方針として、教職員の力を結集した戦略的な大学運営を行います。

この基本方針のもとに、各理事・副学長がそれぞれの担当分野における『具体的な施策"Method"』を策定し、推進しています。各理事・副学長のMethodについては、デジタルパンフレットのP5以降をご覧ください。

3つの「G」

> Green

信州の山々に囲まれた、清涼で緑豊かな、じっくりと物事を考えることのできる環境を活用し、独創性豊かな人材を育成します。また、環境保全・環境共生等に関する研究を推進し、それをもとに環境マインドを持った人材育成を系統的に行います。

> Global

海外からの留学生の受入と日本人学生の海外への派遣を戦略的に、国際的な視点をもって世界で活躍する人材を育成します。また、海外大学・研究機関等と積極的に交流して国際共同研究を推進し、研究レベルの向上を図ります。

> Gentle

未来を支える人材の第一の条件は人や社会に対する優しさであり、気品高く、穏やかに、落ち着いて物事を考えることができる人材を育成します。また、大学内外の様々な人が優しく触れ合うことのできる安全で安心なキャンパスづくりを目指します。

3つの「L」

> Local

長野県内4地域に点在する5つのキャンパスを最大限に活かし、それぞれのキャンパス、それぞれの市町村に特徴的な社会貢献を行います。特に、次世代のまち・ひと・しごと創生で戦略的な役割を果たします。

> Literacy

語学、情報、歴史など様々な教養を身につけ、それらの活用能力を培うことができるカリキュラムを提供します。また、研究を通してこれまで分かっていなかったことの解明やできなかったものの創造を行い、次世代の教養を構築します。

> Linkage

部局を超えて教職員や学生の連携を強め、様々な視点から教育・研究・社会貢献が行える体制を構築します。また、国内外の大学・研究所・医療機関との連携、様々な企業や自治体との産学官連携、地域の方々との連携、卒業生との連携等、様々な連携を強固にし、教育・研究・社会貢献のグローバル拠点を構築します。

これまでの取組を継承発展

山岳環境を活かしたグローバルな学際研究

信州大学概要

信州は日本の屋根と呼ばれる日本アルプスを有する山岳地域。日本においては高地の気象観測施設が非常に少なく、その観測データは重要な価値を有しています。信州大学はこの地でしかできない山岳およびそれに連なる里山における自然と人間の相互関係について調査・研究するため、日本初、そして唯一の山岳科学総合研究所を設置しています。

長野県はほとんどが中山間地域。研究は山岳基礎科学部門、地域環境共生学部門、山岳環境創生学部門、山地水域環境保全学部門、山岳文化歴史部門、高地医学・スポーツ科学部門の6つの部門を設置し、人文学・社会学・教育学・理学・医学・工学・農学の多岐にわたる分野の研究者が総合的かつ学際的な研究を推進しているのが特徴です。

当研究所では、北アルプス槍ヶ岳や白馬などの観測施設、諏訪湖を中心とした山地水環境教育研究センターを施設として基本運用していますが、自然と人間とを新たな視点から見ようとする当研究所の取り組みは、中部山岳地域の全域に及び、山岳防災科学、大気水圏環境の動態や日本アルプスの地形形成の解明、水質環境の調和共存と物質循環、生物多様性、山岳文化歴史研究などの多岐にわたる分野のプロジェクトを進め、多くの研究成果を生んでいます。

さらに、筑波大学・岐阜大学との連携事業として「地球環境再生プロジェクト」も開始され、信州大学で誕生した独自の学問領域「山岳科学研究」は、地球規模での環境変動が山岳地域に及ぼす影響を総合的に明らかにしようとしています。

信州「知の森」の特色 5

山岳科学研究

信州発の新しい学問領域 「山岳科学」の創造。



高標高地に観測設備を設置

気候変動に極めて敏感に反応する山岳地域のデータは重要ですが、日本では富士山を除くと高標高地で気象観測が行われていないため、山岳科学総合研究所が槍ヶ岳や白馬などにモニタリング設備を設置しています。



山岳地域の建築文化を象徴する山小屋研究

信州は登山や山岳観光の歴史は古く、山小屋も山岳建築の文化を伝える貴重な遺産の価値が高いものが多いため、北、南、中央アルプスの山小屋に関する調査・研究は多くの自治体等の関係機関から依頼があります。



高山地域における動植物の生態研究

高山地域ではその環境に適応した動植物、昆虫などが数多く生息しています。環境の変化が顕著に表れる高地において、その変化の状況を正しく捉え、絶滅危機種の保全・保護に関する生態学的研究が盛んに行われています。



東アジア山岳文化研究会

山岳地域の文化に関する研究は、歴史的にもつながりの深い東アジア圏に広がりを見せています。同研究会は信州大学と中国2大学、韓国2大学、ベトナム社会科学院で構成。平成25年度は信州大学で開催しました。



冬の北アルプス 晴雷時に松本から安曇野・大町を望む。長野県全体が山岳地域とも言えます。



中山間地の再生

千曲川を降下する斜面に美しい田が広がると、国の重要な文化的景観、日本の棚田百選にも選定されている懐しの棚田。ご覧の写真のように、ただ景観として保全するのではなく、きちんと農機具が入って、人の営みが持続、発展できることが中山間再生の重要なコンセプトとなっています。

豊かな水の保全と活用を目指す社会実装型研究

信州大学概要

信州「知の森」の特色 8

世界の水を守る高度自律型水循環システムの構築

地域資源等を活用した 産学連携による 国際科学イノベーション拠点。

世界人口増加に伴い、安心・安全な生活用水や農業用水の確保が重要な課題となっており、生活・生産活動による水の汚染も急速に拡大しています。これらの世界的な課題に対して、文部科学省「地域資源等を活用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業」に採択された「世界の水を守るエコ・ナノカーボン研究拠点(仮称)」は、信州大学、東レ、昭和電工が得意とする炭素材料・繊維材料の研究開発成果と、長野県をはじめとする我が国のモノづくり技術を駆使して、革新的ナノカーボン膜による高効率水再生処理手法の確立、耐久性に優れた軽量・高強度な構造材の創製、これらを用いた安心・安全な高度自律型水循環システムの構築を実現する国際イノベーション拠点となります。

世界の水を守る
エコ・ナノカーボン研究拠点(仮称)
文部科学省の「地域資源等を活用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業」に採択された安心・安全な高度自律型水循環システムの構築を実現する国際科学イノベーション拠点。長野(工学)キャンパス内に設置予定。



小水力・ナノ水車発電
里山の用水路などを利用したナノ水車、ピコ水車は集落単位でのエコ・エネルギーサイクルを実現。発電ユニットとそれを利用した独立型スマートグリッドシステムの研究も進められています。

信州「知の森」の特色 9

信州型水マネジメントモデルの創造

信州型エコ・エネルギーシステム構築を 文理融合、産学官連携の 総合的アプローチで。

「水」は人間のあらゆる営みの根幹を担う資源ですが、現在の法制度や地域運営の仕組みでは対応できていない面があります。これらの課題に対して信州大学では「イノベーション政策に資する公共財としての水資源保全エネルギー利用に関する研究」＜2012年、(独) 科学技術振興機構(JST) 社会技術研究開発センター (RISTEX) 採択＞を立ち上げ、文理融合で取り組んでいます。

「水」資源の活用では、法整備などの問題に加え、コスト面での技術革新が必要ですが、信州大学が取り組んでいるナノ水車発電を推進することで、地域内でのエネルギー循環(エネルギーの地産地消)が期待されます。また、地下水熱制御空調システムは、利用した地下水をまた地下に戻すため、環境面に対する影響はほとんどありません。

これらの取組に社会の理解を得るためには科学的エビデンスの提供等、地域と住民、行政、企業、大学などが連携しながら水マネジメントを進めることが重要となっています。この取組により、現行法制度の問題点を明らかにし、よりよい解決策を導き出すきっかけともなります。



地下水熱エネルギーによる冷暖房システム

企業との共同研究の成果。地下水の熱エネルギーを利用する高効率ヒートポンプ空調システムの実証試験プラントが信州大学長野(工学)キャンパスで稼働を開始しました。



水資源が豊かな長野県各地をフィールドに

水資源がとくに豊富な安曇野市や栄村など地方自治体の全面協力をいただき研究フィールドを展開。水資源の保全、活用、さらに水利に関する行政・法制度にまで及ぶ利活用システムの研究も特徴です。

地域の技術集積を活用したメディカル産業創出

信州大学概要

信州「知の森」の特色 7 ライフイノベーション

信州に息づく ものづくり技術と 医の連携。

国が第4期科学技術基本計画で「成長の柱」イノベーション政策のひとつとした、ライフイノベーション。国より長野県は「地域イノベーション戦略推進地域（国際競争力強化地域）」に選定され、文部科学省からは、「地域イノベーション戦略支援プログラム」が採択されています。

医学部・医学部附属病院を中心に医療現場の機器開発ニーズと企業技術シーズとのマッチングを図る「医工連携活動」を推進してきた信州大学は、メディカルシーズ育成拠点を設置し医工連携活動に必要な医学的解析機器を整備してきた歴史があり、この新たなステージで長野県、企業・団体、さらに金融機関も加わった強固な連携で、付加価値の高いメディカル産業創出を加速させています。

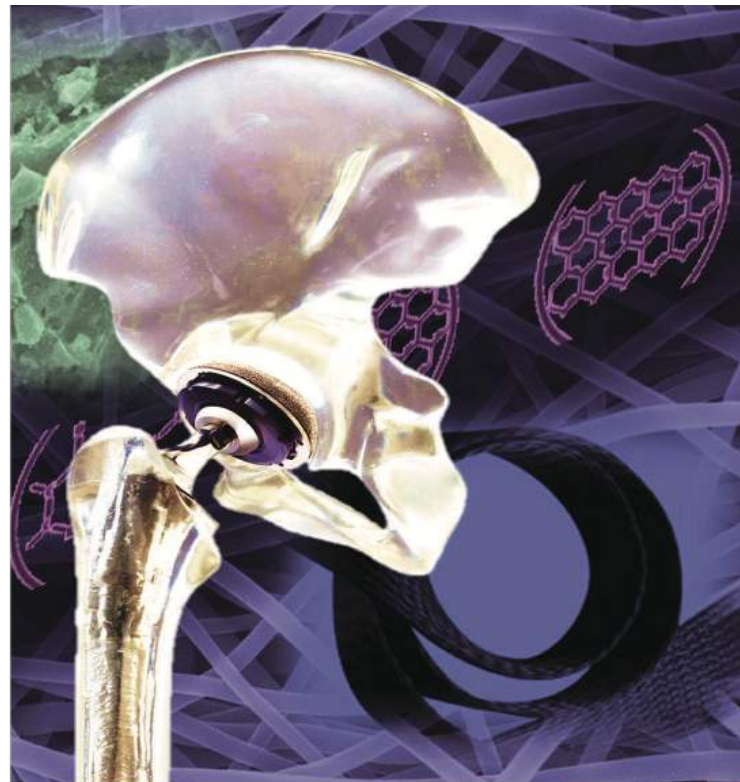
それは、信州大学工学系の豊富な素材技術シーズと長野県の強みである超精密加工技術が融合し、さらに先端医療の立場から医学的エビデンスを提供できる、理想的な「医工連携」の形と言えます。

これまでに研究開発された機器はどれも画期的なものばかり。シートに寝ただけで測定可能な睡眠時無呼吸症候群検査装置、磨耗・破損に強いカーボン・ナノチューブ（CNT）を使用した人工関節、手術の安全性を飛躍的に向上するセンサー付手術デバイスなど、新たなメディカル関連機器の研究開発と臨床応用が進められています。

メディカルをキーワードとした新たな地域イノベーションは、企業の開発部門、大学の研究者・医療従事者・コーディネータなどのソフト面でも強化され、これまでに以上に信州大学、自治体、企業のものづくり力と強く結びつき、活力ある新たな長野県産業の「顔」になっていくことでしょう。

信州地域技術メディカル展開センター

医学部附属病院に隣接し、医療従事者と、ものづくり企業技術者がひとつ屋根の下で医療機器を開発できる理想的な研究施設。経済産業省「技術の機軸」拠点整備事業として大学共同研究室を多数完備。



CNT複合材料を使用した人工関節

再手術が不要になるよう長寿命化が切望されていた人工関節は、カーボン・ナノチューブ（CNT）を使用し磨耗・破損に強く、生体適合性も高い高機能関節が発表され、臨床応用が進められています。



画期的な睡眠時無呼吸症候群検査装置

体中に複数の装置を長時間装着するため、被検査者への負担が課題だった睡眠時無呼吸症候群の検査。新装置はセンサーを内蔵したシート上で寝るだけで検査が可能になっています。



信州メディカルシーズ育成拠点

科学技術振興機構（JST）の地域産業学習共同研究拠点整備事業として長野県・県経営者協会・信州大学で設置。約50種類の先進の医学的解析装置などを整備しています。



信州メディカル産業振興会との連携

信州メディカルシーズ育成拠点と密接に連携し、メディカル関連製品の実用化に向けて取り組む多くの企業・個人を組織化。写真は共同出展した世界最大規模の高齢機器展示会、ドイツツェッセルドルフMEDICAの様子。

学生（サークル等）×地域のコラボレーション

信州「知の森」の特色 11 | 信大生のリアル

信州大学概要



感性を生かした新たな価値創造活動「軍手」
繊維学部感性工学課程の学生達が上田で始めた「ハナサカ軍手プロジェクト」。全国的に紹介されています。
長野県内各地の小学校児童へ寄贈するなど、「軍手」の輪はますます広がっています。

信州という地に魅了され、
地域のために
活動する学生たち。



里山で食育を推進するサークル「洞楽村」

年間を通した野菜づくり等の生産活動や大学生協と連携した地産地消の推進活動が評価され、内閣府による「食育推進ボランティア表彰」を受賞しました。



農学部の学生が主体となるサークル「伊那守」

伊那市水無山で取り組んできた「水無山・里山ハイキング」が評価され、林野庁長官賞を受賞しました。写真の森林整備では地域住民と学生と自治体の「郷学官」が協働して汗を流しています。

信大生は県外出身者が約7割。初めて信州で生活し、仲間との出逢い、授業を通じた教職員との交流、そして信州の地域の人々のあたたかさに触れ、自然に自立心が培われていくようです。課外活動では自主的にキャンパスを飛び出して、積極的に地域活動に参画する意欲的な学生・サークルが増えています。

例えば、森林整備や植林、伐採、ハイキングコースの整備などのお手伝いをする「伊那守」、炭焼き、畑仕事などを手伝う「草むら組合」、田んぼを借りて自ら米を作る「田んぼの会」、地域行事には必ずボランティアで参加する「か〜みやん」、里山の食育推進「洞楽村」など、地域交流ボランティア系サークルの多さは信州大学ならではの特色でしょう。

また、繊維学部の学生による「オンデマンド・リメイク」は上田の街を活性化しようとオリジナルプリントをほどこした「軍手」を製造・販売。全国の新聞や雑誌でも紹介されるプロジェクトとなりました。

さらに、教育学部で美術を専攻する学生たちは、染織や鋳造のワークショップをはじめ、子どもたちの催事、まちのアート活動への参加など、まちと学生がつながる活動に取り組んでいます。



農村に信州教育の美質を学ぶ「You遊未来(Chance)」

県内各地の里山をフィールドにした教育学部の新しい「教育者養成プログラム」。農村の良さを再発見し「子どもをど真ん中」に住民・学生・保護者・高齢者が交流。農作業を通して人間力、実践的指導力を育てます。



農学部ボランティア「農援隊」 栄村の復興支援

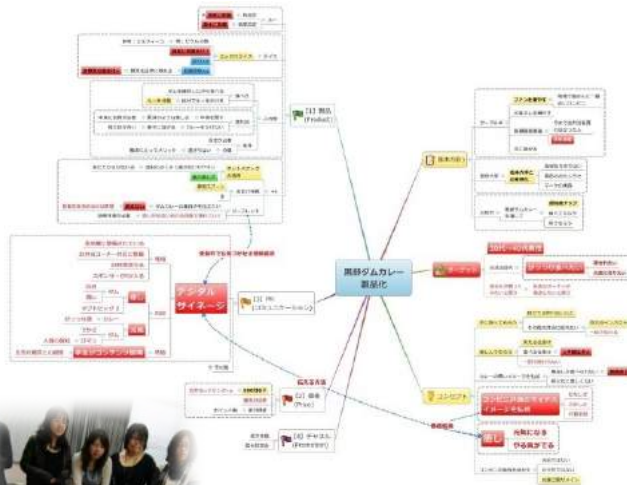
長野県北部地震で大きな被害を受けた長野県栄村で活動する農学部教員と学生によるボランティア組織「農援隊」。今も継続的にボランティア活動を行っています。

産学官連携PBLによる商品化 (PBL: Project Based Learning)

サークルKサンクス × 大町市 × 信州大学 共同企画「コンビニ版黒部ダムカレー」

授業：マーケティング・ブランド論 ▶ 課外実践

商品コンセプト及び販売戦略



産学官の連携フィールドを活用し、
学生がほぼ全て作成をしました

興味を持たせるポスター



電子POPによる注意喚起



学内初イベント



観光雑誌の定番入りへ



信州大学と地域との繋がり

基礎研究の
推進と両立

属人的・結果論

これまで

- 地勢や自然資源、環境を活かした基盤的研究の推進
- 地域の産業基盤を活かした産学連携実践研究の推進
- 学生が地域に目を向け、主体的に地域活動に取り組む



組織戦略的に

これから

- 地域を活用した学生教育（SL、PBL等）の体系化
- 地域連繫活動の志向浸透とシステム化、体制づくり
- 地域の人材育成と大学教育の循環システムへ

「地〔知〕の拠点整備事業」 & 「地〔知〕の拠点大学による地方創生推進事業」へ



2. 地域・連携（連繋）・マネジメント

信州大学としてのポリシーを考える

大学と地域の連繋に関する国際比較研究 1



デビッド・チャールズ氏 来学

英国・ストラスクライド
大学地域経済開発・政策学教授

イギリスにおける大学の地域戦略等の
第一人者として政策策定等にも関わる

University engagement …大学と地域の“連繋”

欧米の大学の多くは経営戦略として明確に地域と大学の関係性を位置づけている（University engagement Strategyの制定・発行や専門部局を設置）。地域における大学の存在価値（地域人材育成・経済）、大学にとっての地域の存在価値（学生の実践学習・研究の実践力）を理解し、両者が相互に発展をすることを共同で考える志向・システムとなっている。

例：大学の施設配置における市政連携（都市計画対応）や地域施設の利用における大学解放、大学施設等の市民活用、シンクタンク機能等。

University of Strathclyde
 信州大学

〔大学地域連携力強化セミナー〕

地域活性化における大学の役割とは

～産業振興と歴史文化振興から大学の地域貢献を考える～

産学連携や地域連携活動は、大学の使命、地域の一員としての責務であるだけでなく、各大学の教育・研究活動の深みのあるものとし、独自性・特徴を創出する源泉として重要な役割を持ちます。そのため、大学経営の観点からも戦略的に取り組むことが、必要不可欠となります。本セミナーでは、イギリスの大学地域連携政策、産業振興や地域開発事例と地域貢献度日本一の信州大学の自然・伝統文化振興による地域活性化事例を通じ、次世代の大学・地域連携の在り方を考えます。多くの教員・職員・学生、地域の皆様の参加をお待ちしています。

2013.11.13

〔水〕 13:30～16:45 参加費無料(要申込み)

場所：信州大学 松本キャンパス（松本市旭3-1-1）人文・経済合同棟6F会議室
※各キャンパスSUNS会議室からも参加いただけます
 主催：文部科学省 科学技術・学術政策研究所・信州大学

講演1
「英国における貢献する大学と地域開発」
ストラスクライド大学 デビッド・チャールズ 教授
(講演・質疑は逐次通訳が入ります)

講演2
「地域の魅力を認識した地域づくり -飯山市小菅の場合-」
信州大学 笹本 正治 教授

プログラム

12:30～ 開場・受付開始
 13:30～ 挨拶:野澤 一博 様(文部科学省 科学技術・学術政策研究所 上席研究官)
 13:35～ 挨拶:三浦義正(信州大学 理事・副学長)
 13:40～ 講演1:デビッド・チャールズ 教授
 15:15～ 講演2:笹本正治 教授
 16:35～ 総括
 16:45 閉会

〔問合せ〕
 信州大学地域戦略センター セミナー事務局
 MAIL: areas@shinshu-u.ac.jp
 TEL/FAX: 0263-37-2075 / 2076

大学と地域の連繋に関する国際比較研究 2

信大NOW Vol.86



地(知)の拠点(COC)整備事業海外事例調査

University Engagement の先進地域を見る!

文部科学省によるCOC事業の採択を受け、本学では「地域志向の人材育成」を目標に、大学と地域との連携活動が行われている。地域志向の人材を育成するうえで、どのようにして、学生を地域に送り込み、地域を考える志向を持たせるかが非常に重要な問題である。欧米では、ボランティア活動やサービス・ラーニングなどを通じ、学生に地域のことを体験させるシステムが定着している。このような活動を日本で「地域貢献」と呼んでいるが、欧米では、その活動のことを「University Engagement」と呼んでいる。大学側がコミュニティにサービスを提供するというより、社会の約束事としてとらえるのである。学生を地域の中で学ばせるために、日本の大学には何が必要なのか。その答えを探るべく、平成26年2月9日～16日、信州大学地域戦略センターの3人の教員がアメリカを訪れた。Wisconsin州立大学とGeorge Washington大学のUniversity Engagement部署の関係者との話し合いを通して、有意義な時間を過ごした。

(文・信州大学地域戦略センター准教授 林 靖人)

ウィスコンシン州立大学メディソン校 モーグリッジ・センター (Morgridge Center for Public Engagement)



センター長のNancy(左)とGlobal Health 部長のLori(右)、Akumi RelationsのDirector International Academic Programs(IAP)のDan Kimberly(中央)、副センター長であるBeth(右)

ウィスコンシン大学メディソン校は、アメリカの中西部の五大湖エリアのウィスコンシン州メディソンのダウンタウンにある。モーグリッジ・センターは、カフェやレストランが並び、昼休みには学生で賑わうストリートモールのすぐ近くにあった。センターでは、DirectorのNancyをはじめ、Asst. DirectorのMegan、Badger Volunteers コーディネーターのStephanieが私たちを迎えてくれた。センター長は、学内のはかのセンターにも声をかけ、関連部署の担当者が私たちのためにかけつけてくれた。

モーグリッジ・センター —キャンパスと コミュニティをつなぐ橋

18年前、卒業生の家族(Morgridge)の寄付で設立された同センターは、もともと学生のボランティア活動において、学生とコミュニティをつなぐのを主な目的としていた。そして、8年前からが活発になるにつれて、大学内の学部と地域のコミュニティをつなぐ機能も拡大してきた。最近では、学部のサービス・ラーニングと地域のコミュニティとの双方向マッチングをより効果的に行うための新しいシステムであるCommunity-University Exchange(CUE)を立ち上げた。現在、モーグリッジ・センターは、キャンパスの近くの約200のNPOやNGOとパートナーシップを結び、ボランティアが可能なところと

Service Learningが可能なコミュニティをそれぞれリストアップして管理しているという。

バザー・ボランティア —リーダー、学生、コミュニティが イニシアティブをとる活動

UWでは、1年間1300人がボランティア活動をしていて、卒業までで考えると、年間80パーセントの学生がボランティア活動を経験してから卒業するという。UWのボランティア活動のなかでも、モーグリッジ・センターのバザー・ボランティア・プログラムは、著しい成長を遂げてきた。バザー(Badger)とは、UWのキャラクターのモデルにもなっているアナグマのこと。BVPは、2008年に学生50人、コミュニティ4つの規模で始まったが、2014年春の時点で参加申し込みをした学生は700人、参加コミュニティは90個ぐらにある。(グラフも載せるが)学部の学生がプログラムを企画してリーダーになり、センターのBVPコーディネーターと相談してチームを作り、地域での活動始める仕組み。一学期の間ずっと同じのコミュニティに通い、少しずつ変わっていくコミュニティのニーズにうまく対応していく体制をつくりながら進め、コミュニティの複合型の問題の解決を目指す。単位はもらえないが、大学が音頭をとってプログラムを作る形ではなく、リーダー、学生、コミュニティがイニシアティブをとって活動するというやり方は学

生にとっても貴重な経験である。

Impact Practice —サービス・ラーニング (コミュニティベースド・ラーニング)

学部の授業とリンクして、単位がもらえるプログラムとしてはサービス・ラーニングがある。UWでは1年間3000人(全学部の5パーセント)がサービス・ラーニングで学んでいるが、リサーチによると、サービス・ラーニングに参加した学生の方が、より高い単位の平均点を見せ、卒業までにかかる時間も短く、単位を落とす確率も低いという。地域に出て、教室で学んだ内容を実際に実行してみたら帰ってきたほうが、学びが促進されるという結果である。さらに、収入の低い家庭の学生や、家族で初めて大学に来た学生、人種的にマイノリティな学生などにもいい影響を与えていることが明らかになっているという。

センターは、コースを作るとき基準をもうけており、各コースのインストラクターは、センターの承認を得てから、カタログなどコースの広報資料を作成する。

評価の方法としては、学期の最後に「満足度」調査をする形で評価を行っている。

学生だけではなく、コミュニティ・パートナーが、どのような要望があるとか、どれくらい満足しているのかを把握することを重要視している。

ジョージ・ワシントン大学 (George Washington University) Center for Civic Engagement & Public Service



Amyセンター長(左) ikukoさん(左) さくら(右)

日本の大学の地域連携活動の課題について語るGWUの活動について説明してくれたMaurice 専務センター長

GWUでのボランティア活動について意見を述べたケイ・スリン

「Deeds, not words,」 —学生に多様な 活動の機会を提供

ジョージ・ワシントンの言葉通り、GWUでは、新入生が入ってくる、必ずGWUで行われているさまざまな活動を紹介すると、サービス・ラーニングのコーディネーターであるMauriceは言う。アメリカでは、こどものごろから教会やスカウト活動などを通じて、ボランティア活動を経験し、大学に入った時点ですでにボランティア精神を身につけている場合が多い。大事なことは、学生に多様な方法で活動する機会を提供し、学生が活動を楽しめるようにすることであると

いう。実際にGWUには、学部のコースとリンクしているアカデミック・サービス・ラーニングひとつとっても、入門レベルから高度レベルまで65個のコースがある。

Exchange of Ideas —GWUはお互いの 能力の交換のための場所

ボランティア活動が、こどものごろから教会などを通じて自然に接するものであるとしたら、そのようなボランティアに対する認識を持っていない日本では、ボランティア活動を通じてのUniversity Engagementの実現は難しいのだろうか。コーディネータ

ーとして、交換留学生たちにボランティアの意味について身をもって教えているMauriceは、GWUでのボランティアとはアイデアの交換に近い感じであると説明した。GWUは、首都という特殊なロケーションに位置し、全部で6万人の学生を抱えている巨大な大学である。センターのプログラムには、それぞれさまざまな文化を持つコミュニティから出てきた学生たちが参加してくる。彼らは、お互いが持っている能力を交換し、地域を効果的に活性化するための活動を行っている。GWUは、さまざまなプログラムを通じて、その交換の場所を提供しているという。

今回アメリカのUWとGWUを訪問し、ボランティアやサービス・ラーニングなど、両大学で取り組んでいるUniversity Engagement活動について聞き、アメリカにおいて、どのような環境が、どのようなように活動しているかを確認する。この中で、ボランティアやサービス・ラーニングという言葉を日本ではそれほど馴染みのない言葉であり、その背景には日本とはずいぶん違う、ボランティアについての概念があることもあり、アメリカの大

学の取り組みを直接日本の大学に導入することは難しい面がある。

その一方で、大学内の関連する組織同士でつながって、部署を越えて連携、協力によって、より効果的な活動が行えるようにしている。GWUのCenter for Civic Engagement & Public Serviceは、学部の学生や大学院生のインターンシップなどを通じて、学生が中心になって行うボランティア活動の場を提供している。また、センターのあるべき姿を考えるうえでも、とても参考になる視察であった。

その他、スタッフ構成の面でも、公募で決まる、志を持ったセンター長と、自分のキャリア設計の一環として仕事に望んでいる、学部生や大学院生のインターンシップなどとても印象的であった。学生をスタッフに加えていることが、きっと学生と接しやすい環境づくり、学生が中心になって行うボランティア活動にもつながっている。また、GWUの地域戦略センターのあるべき姿を考えるうえでも、とても参考になる視察であった。

● Exchange of Ideas ● Knowledge Exchange

地域とは



連携（連繋）とは

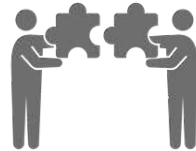
- Partnership



- Relationship



- Collaboration



- Engagement …前提的な意味での「つながり」



University Engagement → University Engagement Strategy

重要なのは、Exchange of Idea, Knowledge Exchange

マネジメントとは

• Operation



• Control



• Administration



• Management…うまく調整する

(≠企業・組織経営)

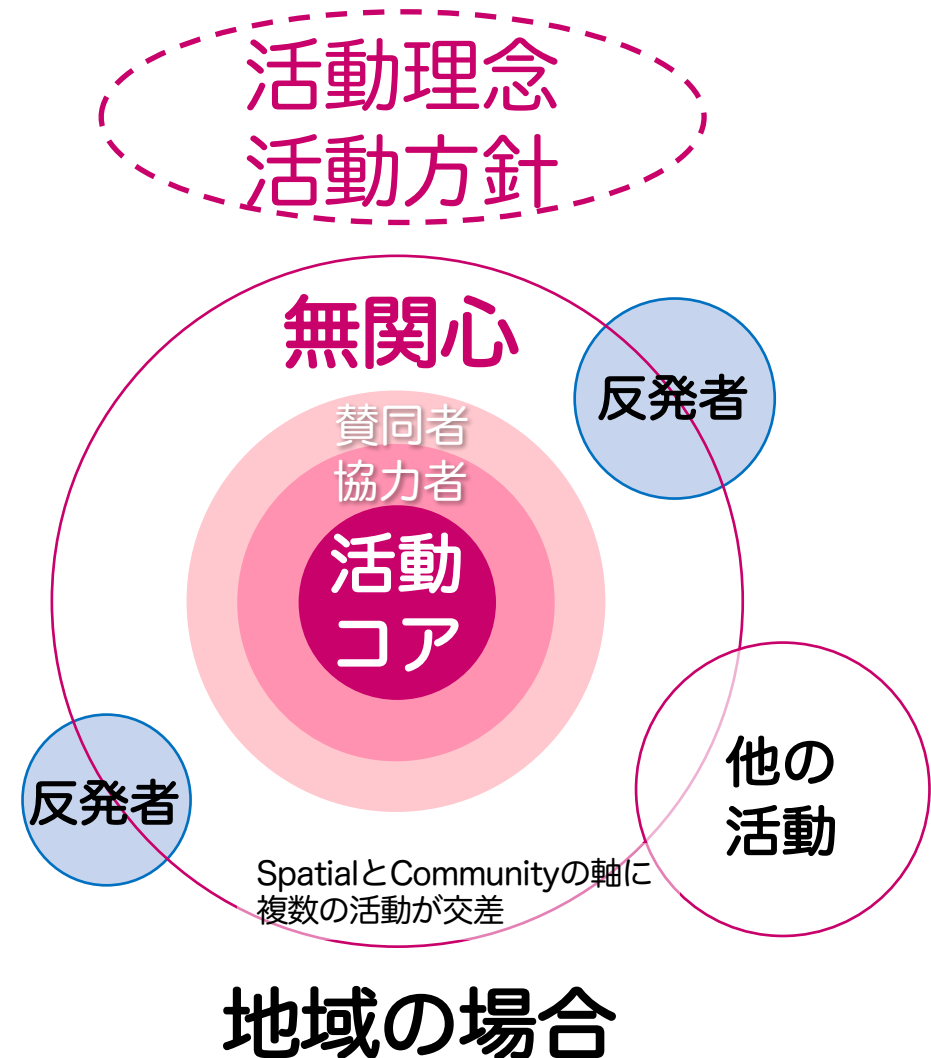
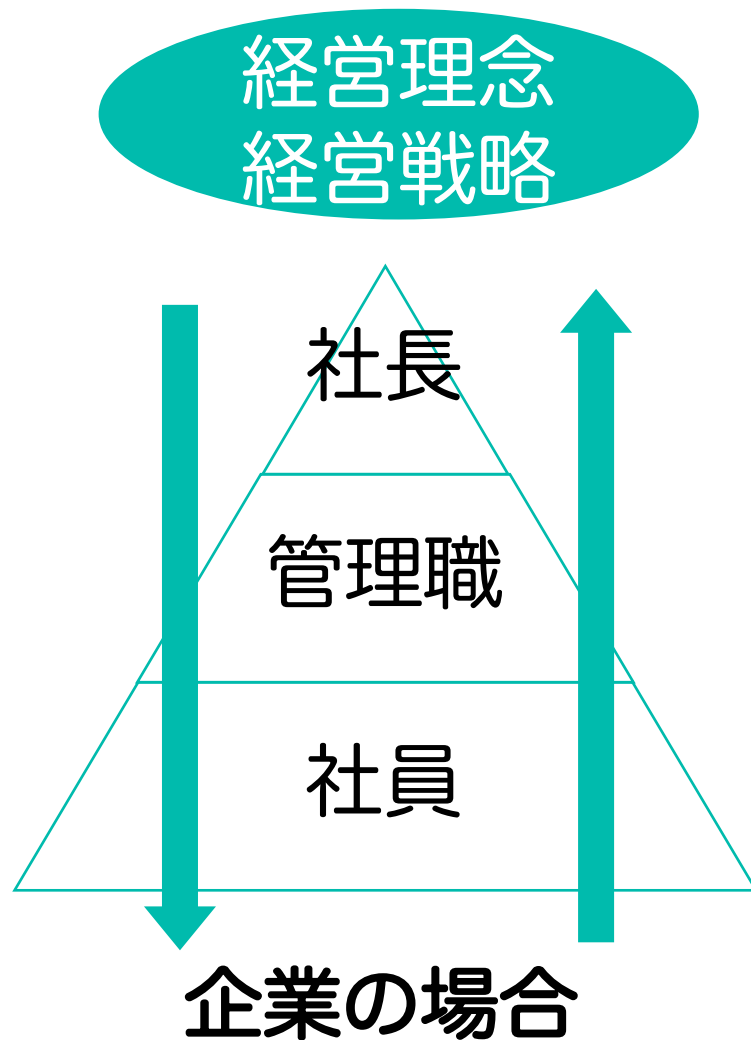


組織、制度、コミュニケーションルール、利害

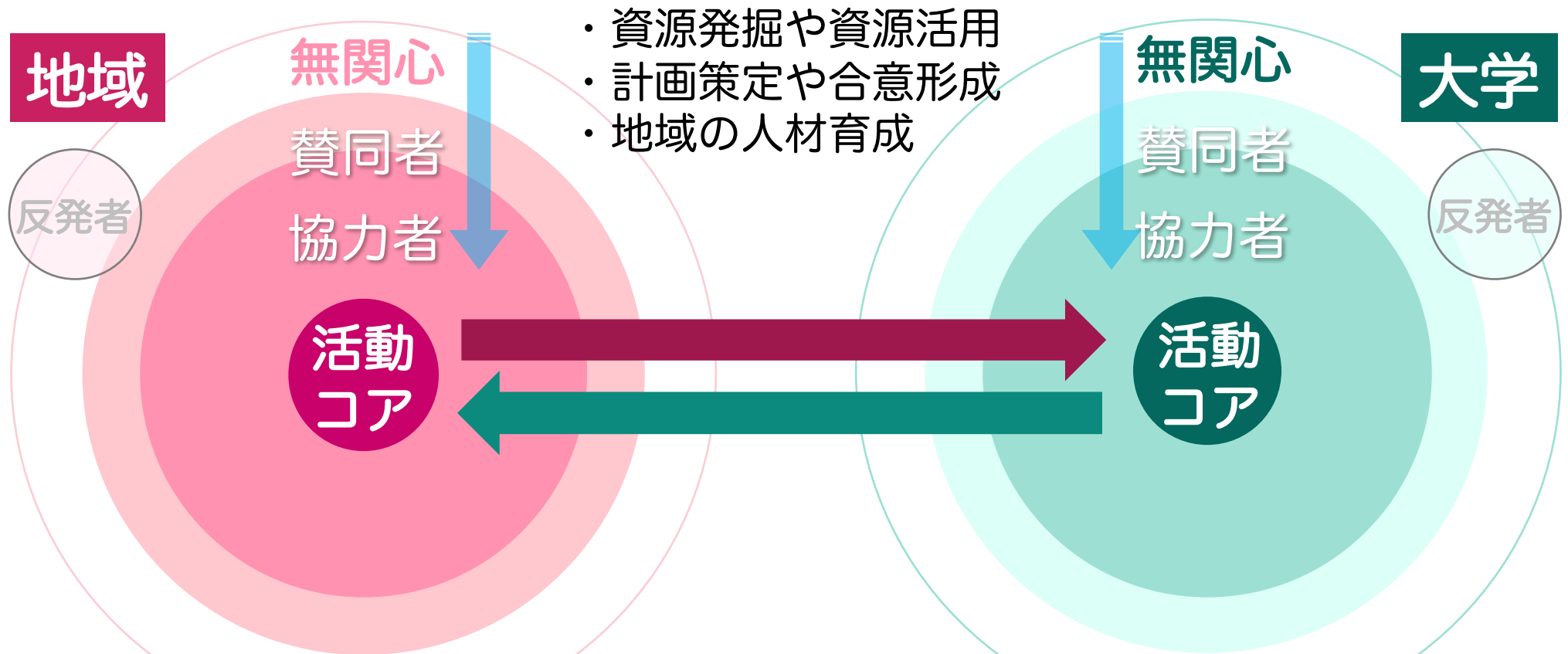
地域連繋マネジメントの難しさ

PBLを気軽に増やせと言われても実は困難

地域とのSLやPBLには、様々な主体との調整が必要



課題解決ニーズと教育研究シーズのマッチング



人と人のつながりをうまく調整する

自分の都合があるけれども相手にも都合がある

出来る人だけではない、苦手な人や分野もある

地域も未来の担い手を育てたい気持ちは同じ (つながっている)

見方を変える、見せ方を変える
可視化と対話による合意形成



3. COC事業を活用したPBL教育環境の基盤強化

全学的な地域志向の強化、地域連繫体制の強化

文部科学省による地域貢献推進事業

錦の御旗として
最大限活用！

「地（知）の拠点整備事業」

大学等が自治体等と連携し、地域を志向した
「教育・研究・地域貢献活動」を一体的に
全学的に進める取り組みを支援する事業

大学を地域の知の中核的存在へ

COC Center of Community

プロジェクト期間：平成25年度～29年度

対話から位置づける長野県の課題

地域ニーズを収集



連携協定



協議会



地域対話



自治体の行政施策
とも対応付けを行う
→予算や事業化

中山間地域
の未来

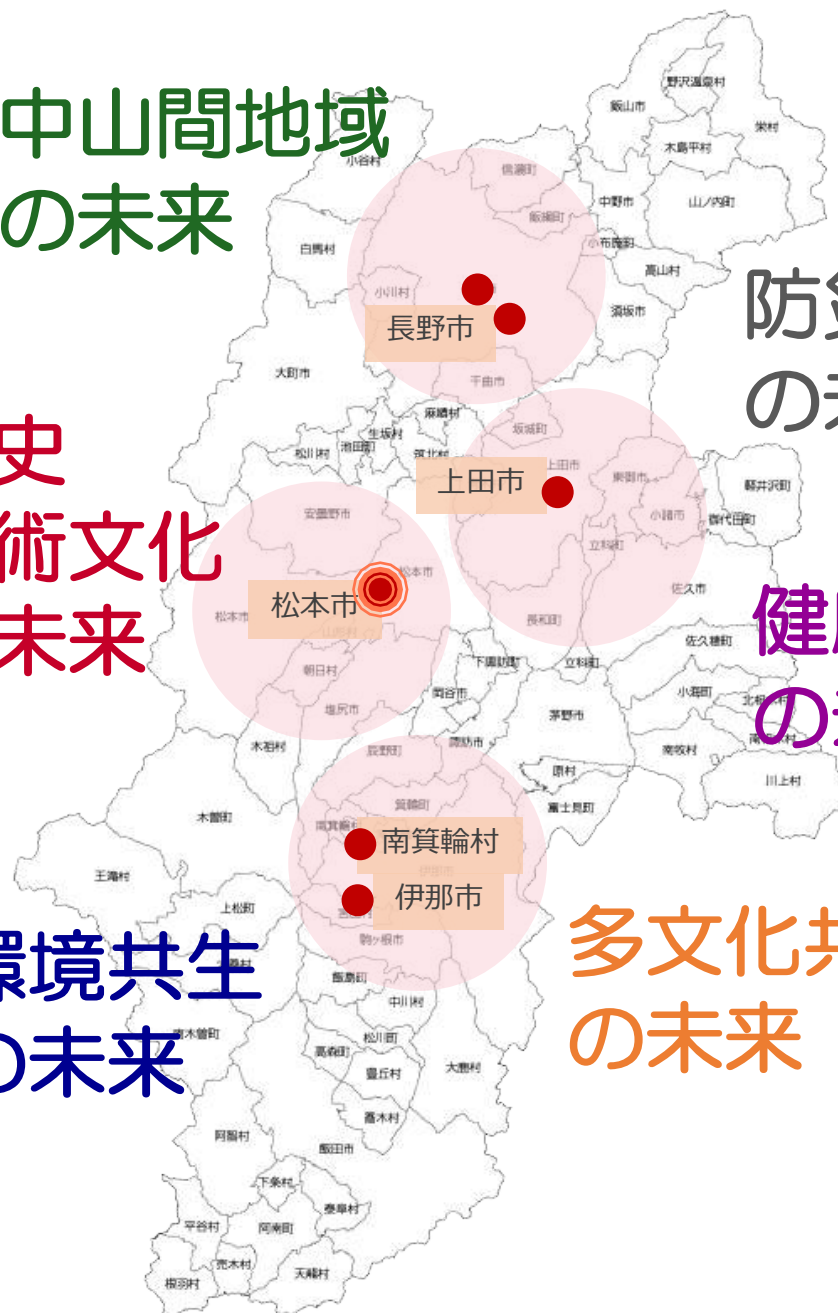
歴史
芸術文化
の未来

環境共生
の未来

防災減災
の未来

健康長寿
の未来

多文化共生
の未来



信州アカデミア事業モデル

1.課題解決知の形成

地域の知と
大学の知を
融合させて
信州の未来
を考える
解決知
を創造

中山間地域の未来学
芸術文化の未来学
環境共生の未来学
防災減災の未来学
多文化共生の未来学
健康長寿の未来学

2.人材育成フェーズ

地域貢献（地域人材育成）

地域戦略プロフェッショナル・ゼミ

社会人の学び直し・経験知の体系化と行動力アップ

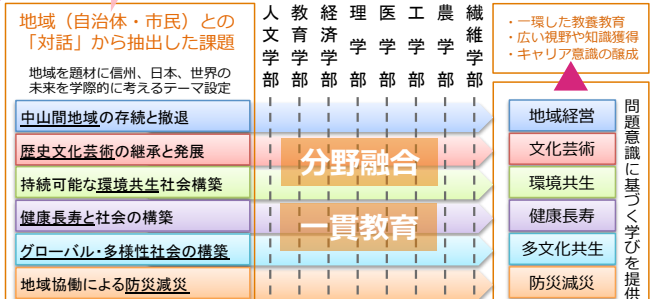


- ・地域課題解決のパイオニア育成
- ・高度専門職人材の育成（大学院進学）
- ・地域コーディネーターの育成

地域連繋による
循環型学習環境構築

プロゼミで育成した地域人材を大学
教育に活用。自身の学びに加え、教
えることで学修を達成する。また、
地域からの踏み込んだ大学参加により
地域と教員・学生の連繋が深まり、
地域志向教育・研究の実践力を促進

キャリア意識醸成



信州の地域課題を通じて学問と社会のつながりを高める

大学教育改革

3.地域協創の実践

課題解決人材の増加
活動支援者の増加



行政・企業など
他の活動の
参加・連繋促進

地域活性化の基盤

信州 知の森
プラットフォーム
(地(知)の拠点)

課題解決活動

地域志向の教員や
学生と協力して、
継続的に支援



地域志向教員の増加
地域志向学生の増加

キャリア形成

信州大学

研究開発

実践者の知



課題
解決知

研究者の知

自治体職員等
の地域講師を
活用した授業
や地域課題を
実践的に学ぶ
授業の導入



自治体職員による講義

研究・教育シーズの強化、開発

平成25年度「第1期 地域志向“研究支援”」採択事業 (25.11~26.3)

代表者	所属(採択時)	職名	研究課題名	応募枠
北村 嘉邦	農学部	助教	四季咲き花木を利用した省力的・多収量な 高齢者向け農業生産モデルの構築	中山間
武者 一弘	教育学部	准教授	中山間地の小規模学校を拠点としたまちづくりの可能性	中山間
阿久津 昌三	教育学部	教授	長野県における限界集落と地域再生・ 活性化に関する社会学的研究	中山間
高橋 伸英	繊維学部	准教授	木質バイオマスの発酵熱を利用したハウス 暖房とCO2施肥による農作物の高収量化	中山間・環境共生
中西 弘充	SVBL	助教	地域資源「桑」の有効活用に関する研究	中山間・環境共生
小西 哉	繊維学部	教授	桑の古木保存プロジェクト	中山間・環境共生
橋本 政晴	教育学部	講師	スケートによる地域振興と地域の生活課題との 接点に関する社会学的実証研究 (長野県南佐久郡小海町／小海スケートクラブを事例として)	文化芸術
上野 豊	農学部	助教	牛用飼料への地産地消コンセプト導入	環境共生
安江 恒	農学部	准教授	低質森林資源有効利用に向けた薪材の科学的性能表示	環境共生
江田 慧子	山総研	助教	地域住民を巻き込んだミヤマシジミの 保全活動と個体群移転技術の確立	環境共生
渡邊 修	農学部	准教授	衛星画像と地形解析による北アルプス地域に おけるシカ侵入経路の推定	環境共生
竹田 謙一	農学部	准教授	放棄された公共牧場の利活用による ニホンジカの農林業被害軽減に関する研究	環境共生
中村 幸男	医学部 附属病院	助教	骨粗鬆症体質リスクサービスを用いた、 長野県内における骨粗鬆症治療戦略	提案課題(健康長寿)
横川 吉晴	医学部	准教授	社会福祉協議会支え合い事業を利用する在宅 高齢者の日常生活活動および健康度の特性	提案課題(健康長寿)
採択事業数: H25年度:25件 →H26年度:53件 →H27年度:71件 →H28年度:85件(予定)				

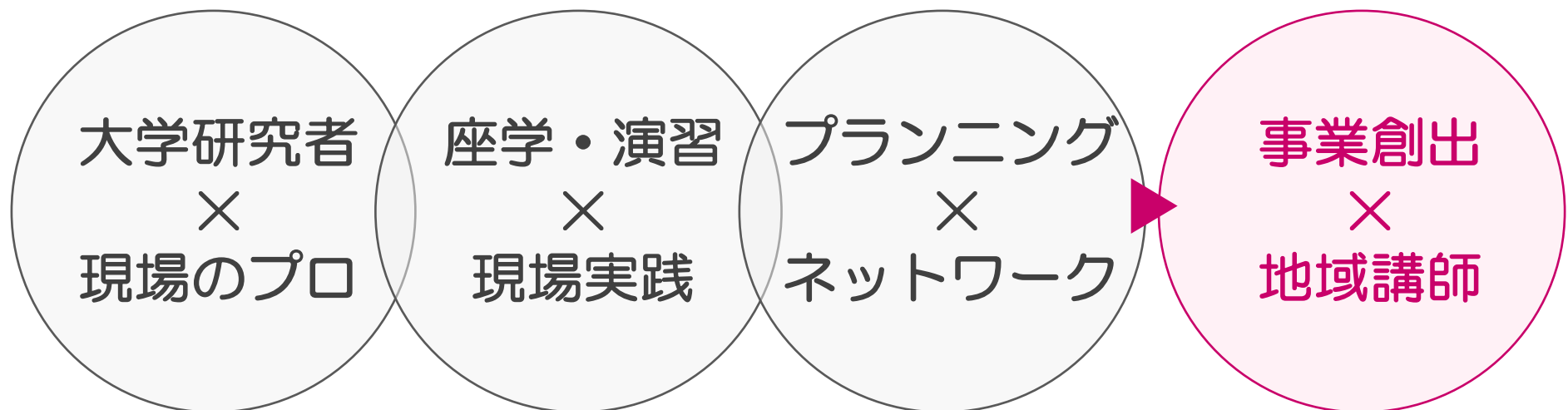
地域戦略プロフェッショナル・ゼミ

地域課題解決を目指す人材を育成



- 地域資源や大学シーズを活用した新しい産業創出に取り組みたい !!
- 地域の悩みを解決して元気にしたい、地域を次世代に残したい !!

▶ ビジネス・パーソンではなく、**ソーシャル・イノベーター & 次世代育成者**へ



課題解決人材の育成カリキュラム開発

北信地域

中山間地域の未来学Ⅲ

講座概要

テーマ：中山間地域の未来学Ⅲ
「本当に、集落は限界なのだろうか
～暮らそう やまざとの現在～」

期 間：2016年10月～2017年3月（予定）

会 場：信州大学工学部キャンパス、
長野市中山間地域 ほか

※開催日時・講師等は一部調整を含むため、詳細はホームページでご確認ください。

開講式	2016/10/1（土）	オリエンテーション＋第2期修了生活動報告
第1,2,3,4回	講義＋グループワーク ＋フィールドワーク ＋合宿（修了生合同）	【フィールド実学フェーズ①】 地域資源探索ワークショップ 数字で知る全国の集落運営・朝まで討論会
第5,6回	講義＋グループワーク ＋フィールドワーク	【フィールド実学フェーズ②】 古民家の解剖学・紐解く集落の生活景
第7,8回	講義＋グループワーク ＋フィールドワーク	【フィールド実学フェーズ③】 神様とまづくり・山への尊厳と郷土文化
第9,10回	講義＋グループワーク ＋フィールドワーク	【フィールド実学フェーズ④】 民話リノベーション・口伝・伝承の再構築
全コース 共通講座	2016/12/17（土） 公開プレゼンテーション	第2回地（知）の拠点円卓会議 長野県 × 信州大学 合同企画
第11,12回	講義＋個人発表 ＋グループワーク	【企画協働立案フェーズ①】 住民対話・集落と家族と百の生茶
第13回	講義＋グループワーク ＋発表会	【企画協働立案フェーズ②】 企画立案・アイデアの芽を紡ぐ
第14回	講義＋グループワーク ＋発表会	【企画協働立案フェーズ③】 中間発表・新しい時代の集落のかたち
第15回	グループ発表 ＋個人発表	【企画協働立案フェーズ④】 最終公開プレゼンテーション ・地域の未来へいまできること
修了式	2017/3/4（土）	全コース合同成果発表会

講座スタッフ

カリキュラム・コーディネーター
信州大学地域総合戦略推進本部
工学部分室 研究員 新 雄太
カリキュラム・アドバイザー
信州大学工学部教授 天野良彦

中山間地域では、複合的で多領域に及ぶ課題が生じています。その課題に取り組む人材（キーパーソン）の有無は、地域や集落の現状を大きく左右します。本講座では、次代の中山間地域のキーパーソンとなりうる人材を育成します。受講生は、「複眼的思考力」をコアスキル、「地域資源の応用力」と「企画・協働力」をサブスキルとして習得することを目標に学びを深めます。

本講座は、(1)地域の今（課題や地域資源）を知り、地域の未来を考えるための視点を提供し、(2)中山間地域をフィールドとして地域住民を巻き込みながら実習を行うことで実学を提供する、(3)グループでの学習と中山間地域で活動する講師やフィールド住民との交流により、地域での取り組みに向けた動機付けを高めネットワークを構築する。(4)各講座に民・官・学から複数の講師陣を配し、カリキュラムの中でも新たな可能性や視点を広がりを見る、以上4つの特徴をもちます。

募集概要

対 象：現在中山間地域で活動をしている方、これから中山間地域で活動をしたいと考えている方など本テーマに問題意識を抱え、学習し行動する意思のある方、原則として全ての講義・演習を受講できる方

定 員：最大30名
（志望動機等により選考し、受講生を決定します。）

内容に関する問合せ先

信州大学地域総合戦略推進本部
中山間地域コース（担当：風間）
電話：026-269-5178（FAX 5007）
（受付時間：平日 09:00-16:00）
メール：COCpro@shinshu-u.ac.jp

中・東信地域

芸術文化の未来学Ⅲ

講座概要

テーマ：芸術文化の未来学Ⅲ
「地域をつくる市民プロデューサー
～芸術文化に地域をつくる力はあるのか～」

期 間：2016年10月～2017年3月（予定）

会 場：信州大学松本キャンパス、
信州大学上田キャンパス、
松本・上田地域の芸術文化施設 ほか

※開催日時・講師等は一部調整を含むため、詳細はホームページでご確認ください。

開講式	2016/10/1（土）	オリエンテーション＋第2期修了生活動報告
第1回	講義	自治体の取り組みと期待を知る
第2,3回	講義＋座談会 ＋グループワーク	地域がもつめる“市民プロデューサー” 地域への目標・演じる、ひらく
第4,5,6,7回	フィールドワーク＋ グループワーク＋演劇 発表＋合宿（修了生合同）	ワークショップ「まちの翻訳」 ～まち歩きワークショップ、そして演劇創作へ～
第8,9回	講義＋座談会 講義＋グループワーク	事例に学ぶ地域コーディネーター 事例に学ぶ地域マネジメント
全コース 共通講座	2016/12/17（土） 公開プレゼンテーション	第2回地（知）の拠点円卓会議 長野県 × 信州大学 合同企画
第10回	講義＋グループワーク	ワークショップの設計
第11,12回	グループワーク	企画構想力を磨くワークショップ1
第13,14回	グループワーク	企画構想力を磨くワークショップ2
第15回	個人発表	最終成果発表会
修了式	2017/3/4（土）	全コース合同成果発表会

講座スタッフ

カリキュラム・コーディネーター
信州大学地域総合戦略推進本部
芸術文化コース（担当：平野）
松本本部 研究員 田村守康
電話：0268-211-5454（FAX 5374）
（受付時間：平日 09:00-16:00）
メール：COCpro@shinshu-u.ac.jp

「地域らしさ」を創り出す芸術・文化は、地域の活性化や地域課題の解決に貢献して「まちづくり」を担うことができるのか？それは地域資源に対する新たな視点や、地域や地域課題との関係性から活動を捉え直すことで実現できるのではないのか？そしてその担い手には、地域の中で創り手と受け手を繋ぎ、伝統的な活動としてマネジメントできるプロフェッサータイプの人材が必要なのではないか？こうした疑問に答えを見つけ、自ら実践できる人材を育成します。

講座は、まず地域を知ることからスタート。地域（課題や資源）に目標を向け、新しい発想を自らの言葉と身体を使って翻訳する「まちの翻訳」ワークショップが前半の山場です。後半は、「市民プロデューサー」に必要なコアスキル「コーディネート力」「マネジメント力」を、地域の実践家から学びます。そして最後は、何をプロデュースしどのような地域社会の未来を創り出すのかをポイントに、自らの企画をメンバーの協力を得てブラッシュアップ。「企画構想力」を磨きます。

募集概要

対 象：芸術文化活動を通じて地域づくりに関心がある方、人や活動をつなげ地域に根ざした持続的な芸術文化活動を創出したい方、テーマに問題意識を持ち学びを実践に変えていく意思のある方、全ての講座を受講できる方

定 員：最大30名
（志望動機等により選考し、受講生を決定します。）

内容に関する問合せ先

信州大学地域総合戦略推進本部
芸術文化コース（担当：平野）
松本本部 研究員 田村守康
電話：0268-211-5454（FAX 5374）
（受付時間：平日 09:00-16:00）
メール：COCpro@shinshu-u.ac.jp

南信地域

環境共生の未来学Ⅲ

講座概要

テーマ：環境共生の未来学Ⅲ
「地域の総合診断
～「環境」を多面的に診るとヒトの未来はどう見えるのか～」

期 間：2016年10月～2017年3月（予定）

会 場：信州大学農学部キャンパス、
伊那谷地域 ほか

※開催日時・講師等は一部調整を含むため、詳細はホームページでご確認ください。

開講式	2016/10/1（土）	オリエンテーション＋第2期修了生活動報告
第1回	講義＋座談会	環境とは何かを考える ・地域を診る視点と新たな技術
第2,3回	講義＋ フィールドワーク	それぞれの立場で考える ・地域住民と土木と環境保護
第4,5,6回	講義＋グループワーク ＋フィールドワーク ＋合宿（修了生合同）	共存する環境を考える ・鳥獣被害は地域の利益にできるのか
第7,8回	講義＋ フィールドワーク	環境の変化を考える ・美味しいキノコの現状
全コース 共通講座	2016/12/17（土） 公開プレゼンテーション	第2回地（知）の拠点円卓会議 長野県 × 信州大学 合同企画
第9,10回	講義＋グループワーク ＋フィールドワーク	新たな環境を考える ・松枯れ被害とこれからの木材産業
第11,12回	講義＋ フィールドワーク	地域の未来を考える ・伊那谷の産業はどうなるのか
第13,14回	講義＋グループワーク ＋フィールドワーク	比較する視点を考える ・伊那谷とランタン谷と家の裏の谷
第15回	グループ発表 ＋個人発表	講座全体を通してまとめ発表
修了式	2017/3/4（土）	全コース合同成果発表会

講座スタッフ

カリキュラム・コーディネーター
信州大学地域総合戦略推進本部
農学部 研究員 横山俊一
電話：0263-37-2075（FAX 2076）
（受付時間：平日 09:00-16:00）
メール：COCpro@shinshu-u.ac.jp

「環境」とは生物から社会システムまで含めた非常に幅広いものですが、実際は「身近な環境」「生物の生態環境」などと限定されるのが常でしょう。しかし本来の環境とは多様な生物や事象が直接あるいは間接的に関連しあい形成されるもので、その大きな環（わ）の中には様々な地域的課題が存在します。環境を知るためには環の中の一つなりに気付く、全体を見渡す力が重要です。

本講座では「異なった視点」や「多様なアプローチ」を構想できる人材の育成を目指し、南信地域の「森林資源」「鳥獣害」「土砂災害」「地域振興」等の課題から「環境共生」を学びます。それぞれの課題のエキスパートからの講義だけでなく、実際の現場に参加者全員で診て歩いて、そこから思考し議論し学んでいきます。地域を再発見する目を養うとともに、すでに講じられている実践的な取り組みを、さらに知と地をバランスよくつなげることでできるようなカリキュラムとなっています。

募集概要

対 象：伊那谷における自然、環境、農業、林業、鳥獣など周辺の自然環境に関心を持って考えることが好きな方、また人間と自然のかかわりあいについて、見直し考えてみたい方、原則としてすべての講義・演習を受講できる方

定 員：最大30名
（志望動機等により選考し、受講生を決定します。）

内容に関する問合せ先

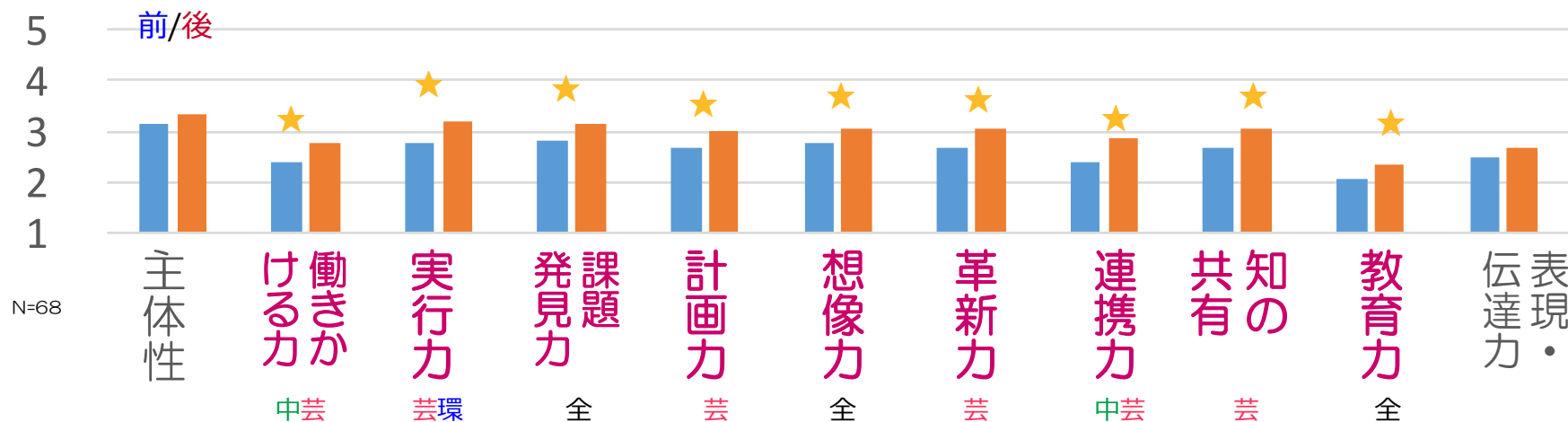
信州大学地域総合戦略推進本部
環境共生コース（担当：アントワーズ）
農学部 研究員 横山俊一
電話：0263-37-2075（FAX 2076）
（受付時間：平日 09:00-16:00）
メール：COCpro@shinshu-u.ac.jp

地域戦略プロジェクトセッション2016

修了生の効力感を強化（受講前後の平均値比較）

一騎当千！地域変革リーダー＆地域講師の輩出（127名）

学生約10名も課外PBLとして参加



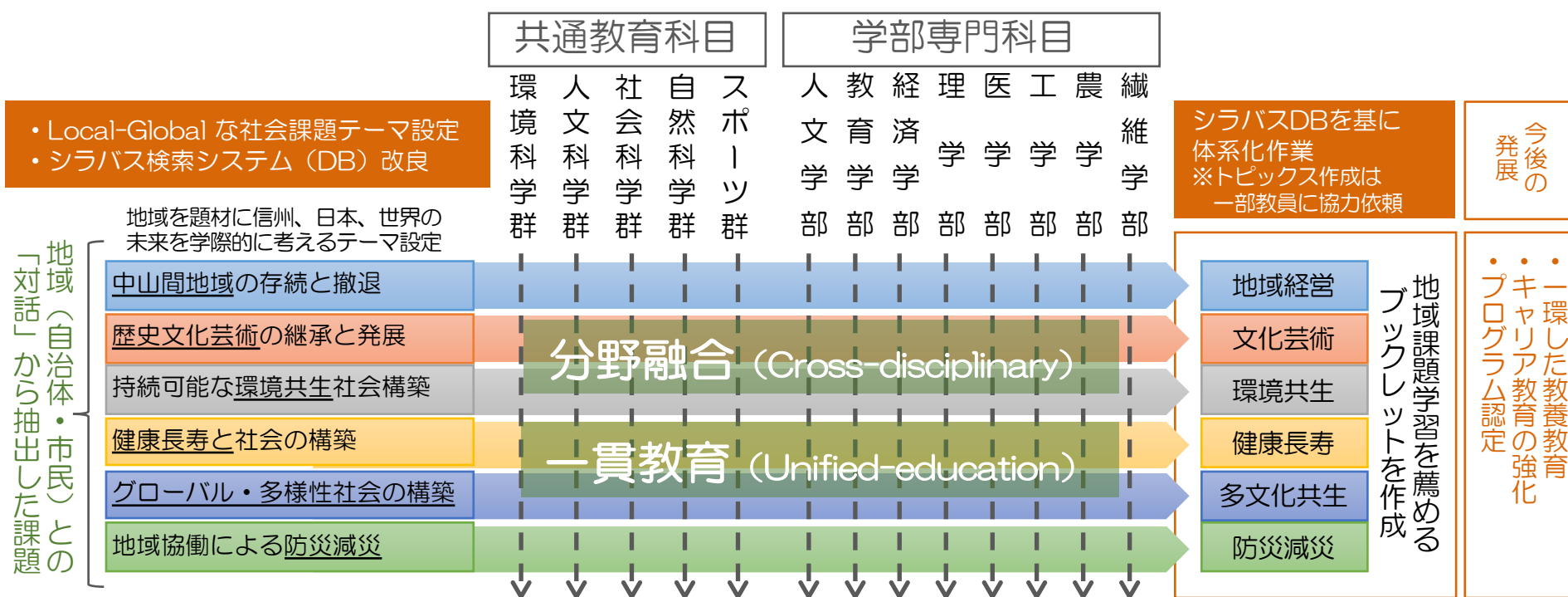
教育シーズの水平的体系化（信大COC教育改革）

学問×地域で、「独創性」ある未来の人材を育成

その数は
なんと800!?

信州大学には、既に数多くの地域連携・地域活用型の教育活動が存在！

全授業を“地域課題テーマ”から**逆引き**して、総合力を身につけることができる**分野融合的・学際的な教育環境を構築**します。



シラバスシステムの改訂と発展



平成29年度（予定）

全学横断特別教育プログラム追加

- ローカル・イノベーター
- グローバル・リーダー

を育成する少数選抜コース設置
に向けて準備中

- ・期間：1年後期～3年前期
- ・副専攻的な位置づけ
- ・集中授業やICTを活用したPBL等によって課題解決力を磨き、3年次課題解決型インターンを最終的な課題とする

COC事業を活用したPBL教育環境の基盤強化

- 地域との組織的連携体制の確立
 - 自治体等の事業施策への位置づけ、企業等の製品開発ニーズの把握
- 地域フィールドや講師のクオリティアップと個別の人的ネットワークの構築
- 研究シーズの開発→教育シーズ
- 教育シーズの整理とブラッシュアップ



地域との連繋、マネジメント体制の確立によるPBLの推進



4. PBL授業の開発（各論）

地域連繋研究員制度の創設

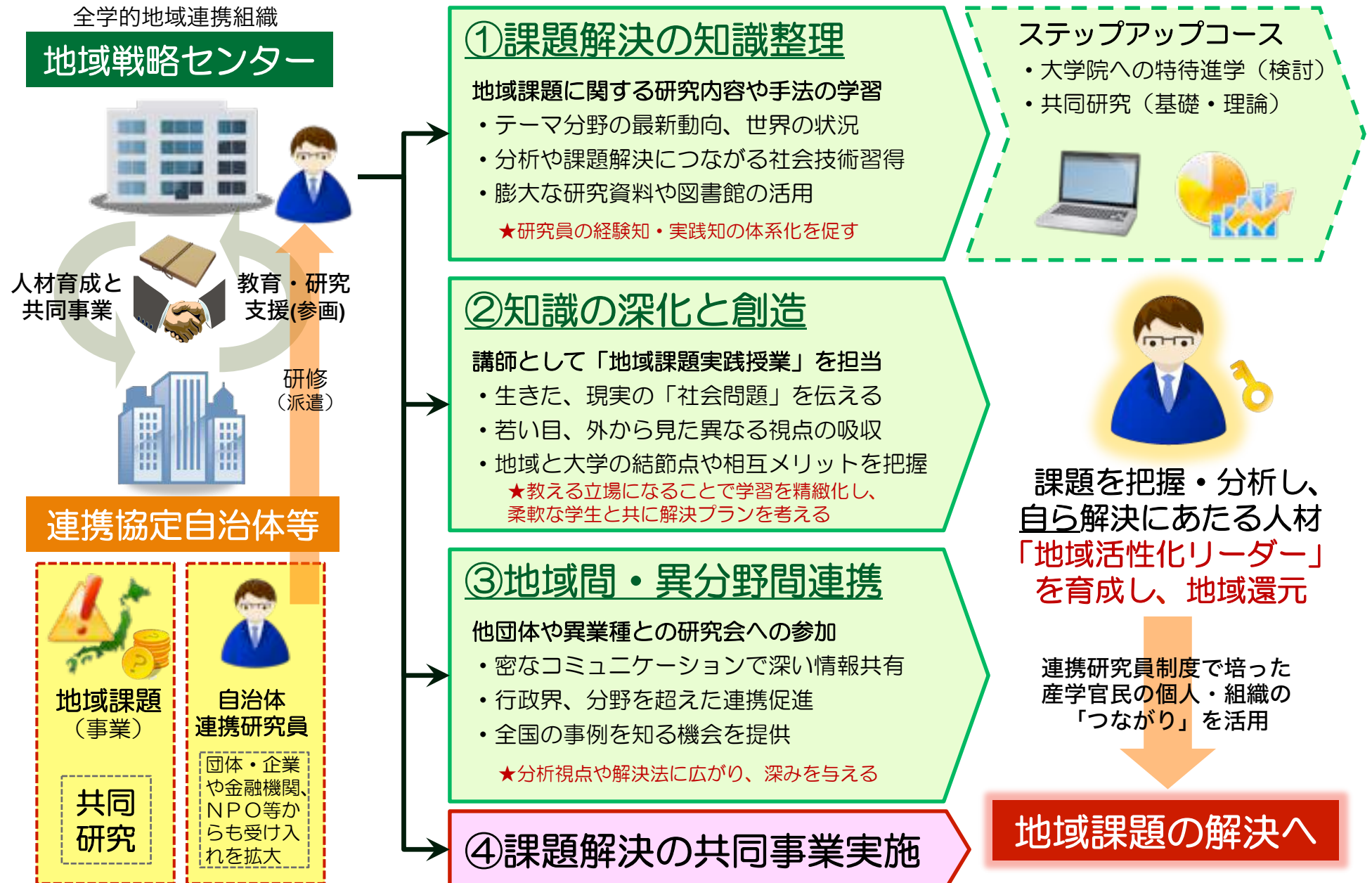
PBL教育は総論賛成だが、各論（授業）は…

- 個別の授業内容や実施は、各教員が担う（押しつけは無理）
 - キャンパス所在地、専門性、対象学年 育成する能力やスキル等に併せて異なるため当然
- ただし、PBLは「コスト」がかかる！
 - 地域との調整に時間がかかる
 - 学生を連れ出す際にお金がかかる
 - 授業内容の設計に時間がかかる
 - 教員も経験値の蓄積に時間がかかる
 - 授業ルール等との調整

PBLを気軽に増やせと言われても実は困難

ただでさえ、色々な負担が増えている。いくら教育効果が大きくても簡単に手が出せない（他業務や授業の質が低下しては本末転倒）

地域連携研究員制度によるWin-Winの人材育成



連携研究員制度を取り入れた共同研究

実績

- 平成26-27年度
 - 大町市
- 平成27-28年度
 - 塩尻市
- 平成29-30年度
 - 塩尻市（予定）
 - I市
 - O町

※一年生を主な対象

- マインド育成
- 地域社会を知る

- 連携協定事業として共同研究契約を締結
 - 研究員（自治体職員）の育成
 - 研究員を中心とした共同研究
 - 上記等と連動したPBL型の教育（授業）
 - ※人口ビジョン（推計）研究とUターン要因研究
 - ※地域の居住環境分析と地方の働き方研究
- 研究費（予算）として年間100万程度
 - 研究員受け入れ費用
 - 事業費（研究・教育活動）
- 自治体より1名を派遣（毎週1日）
- 担当教員の授業に参加し、授業後研究指導や授業に関する打合せ
- 前期授業：2コマを講師担当（WS型）
後期授業：PBLゼミに毎回出席（授業はWS中心）
- PBLにおける地域との調整は研究員が担当

塩尻市シティプロモーション共同研究

CP共同研究の狙い



好住者の増加



地域（ブランド）の
選択とマッチング

認知

どこが
いい？



アクション リサーチ

地方で「働く・暮らす！」ためには？
（ローカル・ワークライフバランスのマッチング）



塩尻市（松本市）の企業や団体・組織を取材
（複数企業取材型インターンシップ・アンケート）

伝える



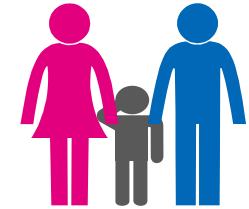
冊子

- ・プレゼン
- ・対話の場

共有

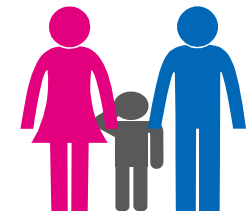
地方で暮らす課題や新しいスタイルを提案
（ローカル・ワークライフバランスの獲得によるカップリング）

塩尻の魅力を
再確認しよう！



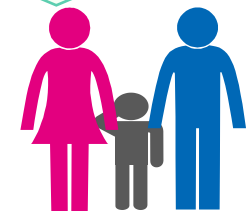
塩尻在住者

ふるさとで
頑張りたい！



首都圏在住
塩尻出身者

地方へ移住して、
新しい生活を！



首都圏在住

共通教育：地域ブランド実践ゼミ

通常授業225hの2倍！400～450h以上だけでなく、課題をこなし、さらに積極的に課外で塩尻に足を運びました！

●シゴトーク「働くを考える対話イベント」 9/30 (水)

第1週	10/02 (金)	ブランド論1 (ブランドとは何か、ブランドと現代社会)
第2週	10/09 (金)	〔学外〕塩尻市イメージ形成フィールドワーク
	10/10 (土)	〔学外〕塩尻市イメージ形成フィールドワーク
第3週	10/16 (金)	ブランド論2 (ブランドのメカニズムとプロモーション)
第4週	10/23 (金)	ブランド論3 (地域ブランド構築の実際)
第5週	10/30 (金)	〔イベント〕塩尻市議会との対話 (地方の仕事と居住)
第6週	11/06 (金)	インタビュートレーニング・ケース1 (長野県企業)
第7週	11/13 (金)	インタビュートレーニング・ケース2 (Knowers)
第8週	11/20 (金)	インタビュートレーニング・ケース3 (SCOP)
第9週	11/27 (金)	インタビュートレーニング・ケース4 (塩尻市地域おこし協力隊)
第10週	12/04 (金)	リサーチ計画の確定と調整
第11週	12/11 (金)	〔学外〕複数企業取材型インターンシップ
第12週	12/18 (金)	〔学外〕複数企業取材型インターンシップ
第13週	12/25 (金)	インタビュー実施報告と内部共有
第14週	01/08 (金)	インタビューまとめと課題解決プラン
第15週	01/22 (金)	ローカル ワークライフバランス (LWLB) を考える
第16週	01/29 (金)	LWLBを考える・プレゼンテーションに向けて
第17週	02/05 (金)	個人発表リハーサル
第18週	02/12 (金)	〔学外〕成果報告会

インタビュー
実施期間

●中部地区COC採択大学学生交流会 3/1 (水) 岐阜 他に高校にも

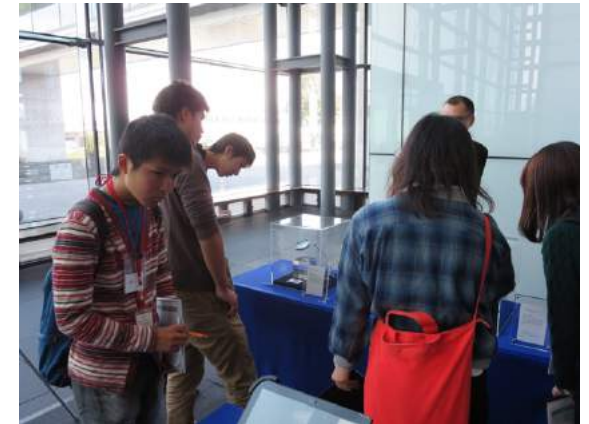
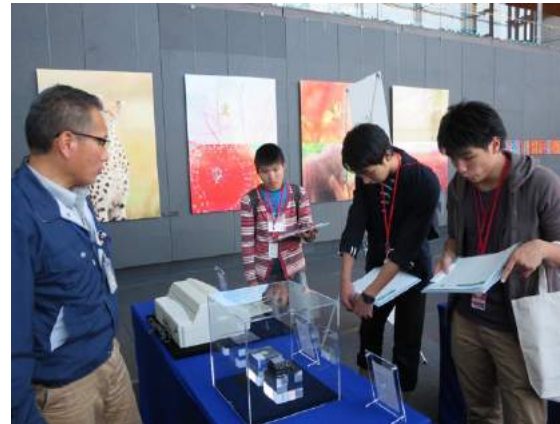
働くを考える対話「シゴトーク」



学生から働くことへの「疑問〔テーマ〕」を投げかけ、それに答えたい！
改めて考えたい！という企業や団体、学生が参加して「対話」を行いました

地域イメージ形成フィールドワーク

セイコーエプソン広丘事業所



世界初小型軽量デジタルプリンターEP101から名付けられた（EP-SON）社名の由来、インクジェット、ウォッチ、プロジェクタなど数々の世界初を生み出してきたEPSONの技術について、現在の開発拠点「イノベーションセンター」で、お話を聞きました。

地域イメージ形成フィールドワーク

夜通しワークショップ
塩尻市や地域の未来を考える



地域を深く知るためには、地元の食を味わい、夜通し語ることが重要！ということで、塩尻市「塩嶺体験学習の家」に宿泊をいたしました。栄養士さんにご協力いただき塩尻の給食を味わい、夜中までワークショップを実施しました。

塩尻市公式HPより引用



2015年10月29日
松本平タウン情報様 掲載記事

信大の地域ブランド実践ゼミ生

塩尻の魅力見つめる

信州大学（松本市）旭の林准教授の「地域ブランド実践ゼミ」を募集する1年生11人がこのほど、塩尻市内をめぐり、同市の特徴を表す企業や産業を視察したり、生活文化に触れたりした。市が本年度、信大と共同研究に取り組む定住促進に向けたシティプロモーションの一環若者の目を通し、市の魅力発見につなげる。（井出順子）

学生たちは2日間で、セイコーエフソンや市民交流センター、などを訪問。今後は企業訪問や奈良井宿 業訪問などを行い、塩

企業見学や給食作り体験

キムタクごはんを作る学生たち

県に人を呼び、定住できるためにはどうしたらいいか。をまとめた、来年2月に報告会で発表する予定だ。

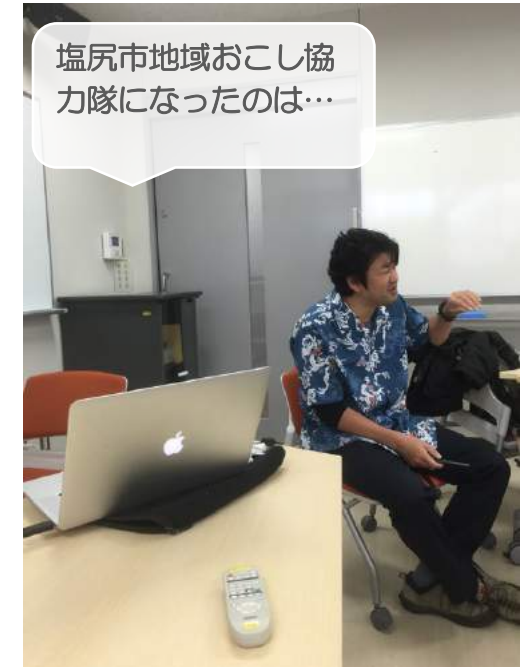
9日の夜は、同市北小野の塩嶺体験学習の家で同市の学校給食メニューから、「キムタクごはん」や特産のナガイガラを入れたフールツボンチなど4品を作り味わった。同市が給食で行う地産地消や自校給食にも理解を深めた。

経済学部1年生の大井麻緒さんは「給食メニューを自分で決める貴重な経験ができて良かった。特産のブドウを使ったデザートや一般向けの給食体験など、塩尻の魅力を発信する企画が浮かんだ」。

林准教授は「学生が自治体と研究に関われるのはめずらしい。こ

対話・インタビュー トレーニング

塩尻市議会からは13名の議員にお越しいただき、若者にとって議員とは、地方で働く形の一つとして議員がどのように見えるかについて対話を行いました。また、複数企業取材型インターンシップのためのインタビュー調査トレーニングにあたっては、地域の様々な方々にご協力を頂きました。



塩尻市地域おこし協力隊になったのは…

[illegible]

2015年10月31日

中日新聞様 掲載記事

複数企業取材型インターンシップ 実施先

14の企業・団体・組織に伺い、インタビュー調査を実施。地方で「働く・暮らす」を考える際に必要な視点、これからの新しい働き方や暮らしへの提案「！」を考えました。→「ローカル・ワークライフ・バランス」





5. PBL教育の効果

組織：社会による評価、学生：行動指標による評価

地域連携活動に対する評価（参考指標）

日経「全国大学地域貢献度ランキング」

★2012年以降、4年連続第1位（総合）を獲得！

2015 年	2014 年	2013 年	大学名	国公 私別	総合 得点
1	1	1	信州大学	国立	87.5
2	3	2	宇都宮大学	国立	84.9
3	12	26	兵庫県立大学	公立	84.3
4	2	5	群馬大学	国立	83.9
5	5	13	長崎大学	国立	82.9
6	9	13	徳島大学	国立	81.5
7	4	3	岩手大学	国立	80.2
8	7	7	北九州市立大学	公立	79.3
9	6	8	大阪市立大学	公立	79.1
10	10	6	長野大学	私立	78.8

キャリア（職業面）での実績評価（参考指標）

「就職力ランキング」上位評価

日本経済新聞社・日経HR共同調査(2015年3～4月)「企業の人事担当者から見た大学のイメージ調査」で信州大学の主だった評価を抜粋した表。
一昨年とは調査設計に変更があったので単純比較はできないが、「独創性」などは相変わらず高い評価をいただいている。
総合ランキング16位は大健闘といったところ。

数字で見る信州大学

出典:価値ある大学2016年版「就職力ランキング」 日経 CAREERマガジン2016年6月22日発行

日本経済新聞社・日経HR共同調査(2015年3～4月)

「企業の人事担当者から見た大学のイメージ調査」

上場企業655社の人事担当者から、
信州大学は各項目で高い評価をいただいています。
平成27年3月に行われた、上場企業655社の人事担当者から見た大学のイメージ調査「新卒での採用がある大学(多い順10校まで)」において大学名が挙がった392大学を対象で、「行動力」、「対人力」、「知力・学力」、「独創性」の4側面での得点ランキングと、4側面の得点を合計した「総合ランキング」が発表された。

16位

総合ランキング

「行動力」、「対人力」、「知力・学力」、「独創性」の4項目の総合得点。昨年とは調査設計に変更があったので、単純比較はできないが、昨年の33位から、大幅にランクアップした。

論理的思考
教養
理解力
「知力・学力」
ランキング

21位

旧帝大をはじめ伝統ある国立大学が上位を占めるなか大健闘。ちなみに昨年も21位。「論理的思考」、「高い教養」、「理解力」の3項目で構成されている。

創造力
個性
着眼点

「独創性」
ランキング

8位

ちなみに昨年は1位。昨年の「創造力がある」、「個性がある」に加え、今年は「着眼点が高い」の項目が追加された。

「業種別」
ランキング
〈製造業部門〉

10位

今年新しく設定された、企業の業種別ランキング。技術・研究開発職など、理系の採用が多いことも評価に直結していると思われる。

技術職
研究開発職
理系採用

「従業員規模別」
ランキング
〈従業員数1000人未満部門〉

8位

これも今年新しく設定された、企業の規模別視点でのランキング。国立大学としては4位。ちなみに上位の国立はすべて旧帝大。

産学官連携
地域貢献

「大学の取り組み」
ランキング
〈地域の産業・文化に貢献〉部門

別調査「大学の地域貢献度調査」で3年連続トップの実績もあり、大学の取り組みのこの部門でもやはり1位の評価をいただいた。

教育
人材育成

「大学の取り組み」
ランキング
〈学業指導に熱心〉部門

大学の基本的な役割の「教育」についての企業評価でトップ10入りした。

個別授業の目標に対する効果

- 地域ブランド実践ゼミの目標
 - 企画力と表現力、行動力の獲得
- 目標に向けた授業設計（プロセス）
 - 心理学基礎、ブランド論の学習（基礎知識）
 - ケースメソッドをベースとした反転学習
 - 情報の可視化と構造化のWSトレーニング
 - 情報分析の基礎と引き出し方トレーニング（インタビュー）
 - プレゼンテーション技法の学習
- 成果（授業内）
 - インタビューの実施、まとめ
 - 各種成果発表の場でのプレゼンや資料作成
 - メディア等での取り上げ
- 成果（授業後）
 - 色々な場への参加（主体的学びの行動）
 - 自らが課題解決のアクション（プロジェクト）を創出

COC学生交流会での発表資料作成（学生作）

信州大学

塩尻市×信州大学 シティプロモーション共同研究

「複数企業取材型インターンシップ」から考える 地方創生への「ローカル・ワーク・ライフバランス」の提案

平成27年度 地域ブランド実践ゼミ 受講生一同

1.概要

地方で「働く・暮らす」は、都会と同じじゃない？

どんな点で感覚（バランス）が違うのだろうか。将来を担う当事者の私たちが、地域企業を取材し、地方で“好住”する人々から、地域とのカップリングに必要な視点・課題を探り、提案や情報発信をします。

2.教育の狙い

ブランドの心理学的研究を題材に、人間の情報処理特性を学びます。さらに学習内容を理解・経験するため自治体の共同研究に参加します（PBL: Project Based Learning）。実践を通じて、リアル・プロブレムに取り組むマインドを育成し、地域・社会の新たなブランドを創造するだけでなく、自分自身のブランドを構築する力も獲得します。



田嶋教授、氏員人
（地域創生センター）

3.内容

1) ブランドを題材に心理学、人間の認知・情報処理を学ぶ

現代社会において企業・人・地域のブランドは、私達の情報処理に大きな影響を与えています。これを心理学という学問分野・研究成果から考えます。授業では、人間心理の不思議などを体験しました。

2) 地域を知るフィールドワークと常に緊張感あるゲストとの対話

授業の第二週からいきなり泊まりがけのフィールドワークで地域のイメージや状況を把握に行きました。グローバル企業の訪問から、縄文遺跡、江戸の文化・産業を各地元講師と回り、夜は地域の学校給食を作って味わい、真夜中まで議論をしました。また授業では、ほぼ毎回共同研究先の職員や地域のゲストが参加して、新鮮で緊張感ある議論を交わしました。

3) インタビュー調査の実践（複数企業取材型インターンシップ）

地方創生において「働く」場は重要ですが、地方の仕事は質・量共に都会とは違います。それになじめないとUターンはうまくいきません。塩尻という地域ではどんな視点が必要か、課題はないのかを探るため企業へのインタビューを実施しました。私達の気づきは、授業の終了後に市長や市民に対してプレゼンテーションを行い、さらにその後ワークショップで深掘りしました。これらインタビュー・気づきは、地方創生をPRするための冊子にまとめます。

4) 地域への提案、そして自らのアクションへ

授業とは別に塩尻市やまちなか、色々なところに自分達で足を運び、考える場に参加しました。そして、現在は、自分達でイベントを企画したり、団体や課題解決プロジェクトを立ち上げて実践に取り組んでいます。



（左）共同研究先である塩尻市から塩尻市役所を訪ねて、地域のコーディネーターや関係者の話を聞いた。右は、塩尻市の「塩尻市ふるさと館」を訪ね、塩尻市の歴史や文化について話を聞いた。



（左）ワークショップで、塩尻市の歴史や文化について話を聞いた。右は、塩尻市の「塩尻市ふるさと館」を訪ね、塩尻市の歴史や文化について話を聞いた。

4.取り組みで得た学び

チェンジの始まりは、「気づき」。その大切さを理解した。一つのまちと深く関わって、地域社会のことを自分事として考えるようになった。授業とは別に何度も地域に足を運び、自分達がまち・地域を変える具体的アクションをおこすようになった。



授業での学びから行動へ（実質の評価指標）

「まつもと空き家プロジェクト」

“学生と地域の方の繋がる場所づくり”がコンセプトのまつもと空き家プロジェクト。今年1月にプロジェクトを立ち上げ、3月上旬に拠点を確保。5月8日にオープンした“ロippiキ”は、信州大学松本キャンパスから徒歩6分のところに位置します。ロippiキが個々にとって特別な場所となったメンバー5人に続き、来る人各々がロippiキを居場所だと思っていただけるよう、現在土日を中心に活動中です。具体的には、ご飯会。その他に朝活や写真展、さらには1日限定居酒屋などなど。ロippiキを使いたい方と共に、様々なイベントを企画しています。ロippiキのことが少し分かってきて興味を持ったかたは是非一度、足を運んでいただきたいところです。住所は松本市北深志三丁目4-11。そして期末試験期間前2週間は学生限定勉強スペースとなります。皆さんのお越しをお待ちしています。



参考

- 特集 地学地就の教育 Case1信州大学 リクルート・カレッジ・マネジメント, リクルート (2016)
- 特集 地域連携によるアクティブ・ラーニングの取組 (1)
「地域・社会との「連繋」による課題解決実践型教育環境の構築をめざして」大学教育と情報, 私立大学情報教育協会 (2016) ※掲載予定
- 信州大学広報誌 信大NOW
- 信州大学概要
- 杉原・橋爪・時任・小田 (2015) サービス・ラーニングにおける現地活動の質の向上-地域住民と大学教員による評価基準の協働的開発-, 日本教育工学会誌38, 341-349.
- 富永・向後 (2010) ブレンド型大学授業における授業形態の好みと成績との関係, 日本教育工学会誌34, 37-40.